「王子様はダンジョンにいる」

　　　　　　　　３年ライトノベル＆小説作家専攻

　　　　　　　　松崎　元輝

　　　　　　　　総枚数20ページ

ダンジョン５階層。

青く輝く水晶の天井と背の低い草花が広がる大きな丸部屋。

気を抜けばここがダンジョンであることを忘れてしまいそうなのどかな風景の中で、私は死にかけていた。

具体的に言うと、ダンジョン最弱のモンスター『ゴブリン』に殺されかけていた。

『——シャアッ！』

「うわっ！」

ゴブリンの会心の一撃。

爪による攻撃を受け止めることができず、私は手に持っていたナイフを落として尻餅をついてしまう。臀部に響く鈍い衝撃。

——敗北。

私とゴブリンの勝負に決着がついた瞬間だった。

下半身を地面に付けた姿勢のまま、顔を上げるとゴブリンは肩で大きく息をしていた。

『ヒィ、ヒィ……フッ！』

「ひいいいいいいいい！」

右手を振り上げる緑色の怪物。水晶の光を反射して、ゴブリンの鋭い爪がキラリと光る。あの右手に貫かれてしまえば、私の体はいとも簡単に死体に成り果ててしまうだろう。

立ち上がることもできず、尻餅をついた体勢のまま後退りした。

『シャアアアッ！』

目の前の死にかけの獲物に止めを刺さんとゴブリンは追いかけてくる。

私は情けない悲鳴を上げながら無様に逃げ惑った。

男の人が見れば一瞬で笑い出すような滑稽な光景。ゴブリンに殺される惨めな少女。

どうやら私には初めから格好いい女騎士や美しい聖女になれる資格なんてなかったらしい。

（終わった。……間違いなく、終わった）

卑猥で浅はかな妄想に取り憑かれた者の末路。ゴブリンの餌。醜い冒険家の子。

やがてゴブリンに追いつかれて、私の短い冒険家生命は終わりを迎えてしまう。

絶体絶命の危機を助けてくれる王子様なんていない。迷宮で出会うのは美少年ではなく恐ろしいモンスターばかり。

そもそも日々多くの犠牲者を出すダンジョンで、それを叶えようとした時点で私の人生は終わっていたのだ。

あぁ、キラキラした目で絵本を読んでいたあの頃の自分に戻りたい。そんな物語は絵本の中にしかないと言い聞かせるために。そんなこと、物理的にも私の命運的にももう不可能だけれど。

ドンッ、と背中が壁にぶつかる。行き止まりだ。

臀部を床につけた体勢のまま逃げ続けて、とうとう部屋の隅にまで追い詰められてしまった。

右手を高く振り上げたゴブリンが一歩ずつこちらへ近づいてくる。

（あぁ、死んでしまった……）

子供のように泣き喚く。戦うことも逃げ出すことも諦めて、私はその場で涙を流し続けた。歪んだ笑みを纏うゴブリンの顔が、涙で一層醜悪に見えた。

——結局、ダンジョンに王子様なんていなかった。

自分を死地に追いやった言葉を性懲りもなく思い浮かべる。

目の前にゴブリンが到達し、右手が振り下ろされようとした。

次の瞬間、緑色の怪物の胴体に銀色の線が駆け抜けた。

「ふぇ？」

『ジャ？』

間抜けな声を同時に上げる私とゴブリン。

しかし銀色の線は止まることなく、ゴブリンの両肩、両脚、首の付け根を切り刻み、最後に魔石ごと胸部を貫いた。

『——————ッ！』

爆散。

魔石を破壊されたゴブリンは、絶叫を上げる間も無く体を灰に変え爆発してしまう。

頭に降りかかる灰も忘れ、呆然と時を止める私。

煙が晴れ、モンスターの代わりに現れたのは白髪の美少女だった。

彼女の長くて美しい髪は風に揺れている。細くて鍛えられている体は銀色の鎧に包まれている。黄金色の瞳に映るのは、大量の涙を流す私の顔。

「マーガレットちゃん……」

私から離れた場所でモンスターと戦っていたはずの友人が目の前にいる。窮地に陥っていた私を助けるために駆けつけてくれたのだとすぐに理解した。

マーガレットちゃんの周りがキラキラと輝いて見える。

異性だったら間違いなく惚れていた。いや同性であってもマーガレットちゃんの格好良さに私はもうメロメロである。

ダンジョンに王子様はいなかったけれど、女神様はいた。

立ち上がって目の前の美少女に抱きつこうとした次の瞬間、

「しーごーとー、しーろー！」

モンスターよりも恐ろしい女神様の雷が落ちた。

「荷物持ちがモンスターと戦うな！ ゴブリンに負けるくせに前線に出てこようとするな！ 弱いなら私の後ろに隠れてろ！ 自分の仕事をしろお‼︎」

「ごめんなさあああい⁉︎」

ゴブリンに追いかけられた時よりも速く、その場から走り出した。

地面に落とした自分のナイフを拾い上げて、大きなバックパックの裏に姿を隠す。

息を潜めて深呼吸。すう、はあ、と息を吐き呼吸を落ち着かせるとバックパックの裏から顔を出した。

５階層で探索をしていた私達のパーティはモンスターの群れに遭遇した。五人組のこちらに対して、八匹いたモンスター達は器用にも包囲網を敷いて私達を追い詰めようとした。

しかしマーガレットちゃんが飛び出すようにしてゴブリンを一匹倒したことによって乱戦が始まったのだ。

現在はそれぞれの相手と戦っている。マーガレットちゃんも先程の場所から移動して次のモンスターを剣で攻撃しているようだ。

私はこのままここで隠れていようかと考えたけれど、止めた。

一対一だと私は負けてしまうけれど、背後から奇襲する形ならばパーティに貢献することもできるだろうし。もしモンスターを倒すことができれば、マーガレットちゃんに褒めてもらえるかもしれない。

ナイフを右手に装備。今度は落としてしまわないように力強く握りしめる。

パーティメンバーと戦っているゴブリンに狙いを定めて一直線に駆け出した。

『シャアア！』

「え、うわっ⁉︎」

横からの不意打ち。新手のモンスターが現れた。私の突撃は途中で止められてしまう。

『シャアア！』

『シャアア！』

『シャアア！』

興奮した様子でこちらに向かってくるゴブリンが三体。しかも棍棒なんてものを構えちゃっている。

（あ、これは無理だ）

そこからの私の行動は迅速だった。

進行方向から振り返り、親友がいる方へ走り出す。

「マーガレットちゃーん、助けてー⁉︎」

☆☆☆

ダンジョンを有する、いや、ダンジョンの上に築かれた世界唯一の居住地、『迷宮都市』にはたくさんの冒険家がいる。富と名声を求めた荒くれ者がこの街に集まるのだ。

そしてもう一つ、この街にやってくる人達がいる。【レガリア】という組織を作り、冒険家達にモンスターと戦うための【恩恵】を授け、冒険家相手に商売を行い、時に自らも冒険家達と同じようにダンジョンに挑戦する王子様達だ。

彼らはギルドが管理するこの街で自分の血を分けた眷属と共に生活する。その仕組みは小さな国と言っていいだろう。

『迷宮都市』は世界で一番栄えている街だ。冒険家がダンジョンから持ち帰ってきたアイテムにより街は急速な発展を遂げた。

ここから少し離れた場所にある農村の家に住んでいた私は、ダンジョンや冒険家だけでなく、この街そのものにも興味があったのかもしれない。

『王子様はダンジョンにいる』

つい一ヶ月ほど前、そう言って私をこの街に送り出した母の言葉を今でも鮮明に覚えている。

だけどお母さん、ダンジョンに王子様はいませんでした。ダンジョンにいるのは、凶悪なモンスターばかりでした。

それが一ヶ月間、冒険家として生活した私の答えである。

ダンジョンは『迷宮都市』が築かれる遥か以前からこの地に存在していた。

たくさんのモンスターが迷宮から溢れ出し、地上へ進出していった。『迷宮都市』はモンスターの進路に蓋をするような形で作られた。

ダンジョンとはそもそも何なのか。何故モンスターを産み出すのか。ダンジョンの最奥に何があるのか。その答えは誰も知らない。当然、そこまで辿り着いた者が一人もいないから。

ダンジョンの謎の解明は、冒険家の目的の一つなのかもしれない。ただ明日の自分の命の行方も分からない私には関係のない話。

四方を壁に囲まれたこの都市を二分する大通りは、たくさんのお店と様々な種族の人々でごった返していた。

堅牢そうな鎧に身を包んだドワーフの男性。探索帰りと思われるエルフの一団。きっと彼等も私より遥かに強い冒険家なのだろう。

そんなすごい人達がこの街にはいる。きっと彼らがダンジョンの謎も解き明かしてしまうのだ。

そんなことを考えながら私は大通りを歩いていく。探索用のバックパックを背負いながら、この先にある道具屋さんを目指して。

今は隣に白髪の美少女はいない。彼女は武器の整備をしてもらうため、別の通りにある武器屋に向かっている。

冒険者広場から伸びる大通りの真ん中。一つのお店の前で人集りができていた。

『迷宮都市』でも指折りの人気の魔法道具のお店。周りの商店と比べても一回り以上大きいその外観は、強い魔石灯の輝きに彩られている。

私も周りの人達と同じようにそのお店の陳列棚に引き寄せられていく。

「うわぁ」

明かりに照らされて光沢を放つ魔法道具達。ガラスの向こう側に並べられた商品に私は目を奪われてしまった。

崇高な魔導士が身に付けるような魔法のローブ。最新型の魔法銃。エルフの住む森の聖樹の枝で作られた魔法の杖。素人である私が見ても一級品の物だと分かる品ばかりが鎮座している。

バックパックが後ろにいた人物とぶつかってしまう。ヒューマンの男性。すぐに「ごめんなさい」と謝ったが、男性は何も言わずに立ち去ってしまった。

何であんな近くにいたんだろう、と思ったけど私の意識はすぐに魔導書の方に向かう。

こんな希少な品だからやっぱりとても高額。一日分の生活費を稼ぐのがやっとの私じゃ、一生かかってもこんなお金を用意することはできない。

仮にこの本を手に入れることができても、私よりマーガレットちゃんが使った方が有意義な魔法を発現するだろう。

ギルド本部で換金をした後、お金と一緒にこのバックパックに入れたはずだ。

そしてすぐに財布がなくなった原因に思い当たり、私はお店を飛び出した。

立て付けの悪い音がなる扉を開けると、目の前には多種族の人で溢れかえっている大通りがある。通りを行く大勢の人に向かって私は叫んだ。

「私の、財布を、返せー！」

私の声を聞いて振り返る人の群れ。

その中に一人、走り出した男性がいた。あの男だ。

私は数分前、通りの反対側の店で、商品に見とれている時にぶつかったヒューマンの顔を思い出す。あいつが財布を持っている。

大通りで突如始まった逃走劇。犯人は男性。追いかけるのは私。「何だ、何だ」と通行人は道を開ける。

「パーティのを買うお金なんです。返してくださーい！」

ダンジョンではゴブリンよりも弱い私だけど、この背中にはゼラニウム様から授かった恩恵が確かに刻まれている。【ステイタス】を持つ私の体は、一般人と比べて何倍も強靭で俊敏だ。

始めにあったお互いの距離がだんだんと近づいていく。

そして男の肩を捕まえようと右手を伸ばした時、手のひらに激痛が走った。

「うっ⁉︎」と声を漏らして、思わず足を止めてしまう。

手のひらに鋭い傷口。血が溢れて流れ出す。

前を走る男の方を見ると、男は右手に血の付いたナイフを持っていた。

一瞬、足を止めた間に引き離されてしまう。

私がもう一度走り始めると、男を挟んだ前方から小さな男の子が歩いてくる。小人族とも異なる幼い雰囲気。大きな花束を抱えていて顔は見えないが、背が低くて遠目からでも可愛らしいことが分かる幼子だ。

こちらの様子に気づいていないのだろうか。真っ直ぐにこちらに向かってくる。「危ないよ！」と声をかけるが男の子は止まろうとしない。

ナイフを振り回し叫ぶ男。男の子との距離は刃の届く距離まで近づく。

しかし凶刃は少年の目の前を通過して、何事もなく終わった。

交差する二人。ナイフを持った男は、そのまま男の子の横を通り過ぎていくと思われたが、しかし頭と足を空中で入れ替えるように一回転して盛大にずっこけた。

地面でジタバタする男。追いついた私は無防備になった後頭部に飛び蹴りをお見舞いする。

気絶した男の服をまさぐり盗まれたものを探していると、後方から可愛らしい声が飛んできた。

「もしかして、これはあなたの物なのです？」

上から落ちてくる一つの影。ストンと音を立てて、薄紫色の財布が私の目の前に現れた。

弾かれたように振り返る。男の子の姿が先程よりも遠くに行っていた。追いかける。

「大丈夫？ 怪我してない？」

「あんな盆暗に僕が傷付けられるわけがないのです」

声をかけるが、気に留める様子もなく歩みを進める男の子。短い脚なのに歩くのが速い。

「待って！」

「急いでいるのです。この花束を楽しみにしている人がいるのです」

「お礼をさせて！」

「この程度のことでお礼なんていらないのです」

「君の名前を教えて！」

立ち止まる。私も男の子に倣ってその場に静止する。

男の子は背中に剣を携えている。冒険家の真似でもしているのだろうか。豪華な装飾の柄と鞘だけど、男の子の身長と合っていなくてチグハグだ。

小さな人差し指で上を、いや空を指し示す。その先にあるのは、赤く輝く太陽。

「お母様は言っていた」

反転。少年の隠されていた顔が露わになる。

空色の髪。白くきめ細やかや肌。頰は血のように赤い。

「青き空の下に咲く、太陽よりも誇り高い花」

女性ならば将来は絶世の美少女になることが約束されたような顔に嵌め込まれた瞳の色は、。

鋭い眼光が私の瞳を、心を射抜く。

「ブロッサム王国第一王子、デルフィニウム・ステイメン」

か……。

「それが僕の名前だと」

可愛すぎる……！

王子様はこちらに近づいてきた。本当に小さい。身長が私の半分、腰の辺りまでしかない。

「あなたの名前は何なのです？」

先程までの雰囲気と変え、笑みを溢れさせた表情を斜めに傾けて尋ねてくる。きっと自分は名乗ったのだからお前も自己紹介をするのが道理だ、ということなのだろう。

年相応というか見た目相応の花のような笑顔につられて私も笑顔になってしまいそうになる。

「シ、シオンと言います。王子様は本当に男の子ですか？」

「お母様は言っていた。僕は世界で一番可愛い男の子だと」

「王子様は何歳ですか？」

「五歳なのです。シオンちゃんは冒険家なのです？」

ダンジョン探索用の私の服装を見て、王子様が質問をしてくる。やっぱり冒険家に興味があるのだろうか。

「はい！」

「それじゃあ、このお花をプレゼントするのです」

持っていた花束の中から一輪、花を抜き取り渡してくれた。王子様の髪にも似た青い花。

膝を屈ませ、それを受け取る。その時に触れた王子様の小さな手はとても柔らかかった。

「お守りなのです。持っていればまた会えるのです」

目線を合わせたことで王子様の顔がよりはっきりと見える。本当に同じ人間なのかと疑ってしまうくらい、王子様は天使のように可愛らしい。小さな顔が微笑むと、目の前にいる天使は一層愛らしくなる。

思わず王子様の手を両手で掴んでしまった。

「王子様。お礼がしたいので一緒に食事をしてください！」

自分でも何を言っているのか訳が分からない言葉に、王子様の顔はきょとんとしてしまう。しかしすぐに戻った。

「お母様は言っていた。この世には絶対に守らないといけないものがある。それは女の子との約束だと」

「王子様……！」

一瞬、上に向けた人差し指をすぐに降ろす。

「だけど今日はこれから行かないといけない場所があるのです。次に会った時に食事をするのです」

「約束、ですか」

「なのです」

体の向きを変え、テクテクと歩き出した王子様。その小さな後ろ姿を私は見送る。

手の中には王子様から頂いた花が残されていた。花束を待っている人がいると言っていた。この花は私が貰っても良かった物なのだろうか、と花を見つめ思案する。

「ありがとうございます！」

小さくなっていく王子様を見送って、手の中にある花を握りしめた。

この花が私と王子様をもう一度引き合わせてくれる。なんとなくそんな気がした。

☆☆☆

土の地面と土の壁が造る通路を私達は進む。

のどかな草原が広がっていた５階層のまでとは異なり、６階層は洞窟のような狭い通路でできた迷路だった。

これまでとは打って変わった静粛な雰囲気に、私は緊張感を覚えてしまう。

６階層の地図を見ながら、先頭を歩くマーガレットちゃんと剣士君の後に続く。

「えー、シオンさんショタコンなんですかー⁉︎」

話しかけてきたのは、弓使いのパーティメンバーだった。

隣を並んで歩く仕事仲間の声に、私は地図から目を離さずに返答する。

「ショタコンじゃないですってば」

「じゃあどうしてそのお花を大切に持っているんですか？」

私の頭に挿している花を触ろうとする弓使いさん。その手を私は振り払う。

「これは王子様から頂いた物ですから」

「やっぱり好きなんじゃないですか」

６階層の土質には水晶と同じ成分が含まれているらしく、壁自体が淡く発光していて、光源がなくても通路の先まで見渡すことができる。私が地図で現在地点を確かめることができるのも、壁から溢れる光が照明代わりになっているおかげだ。

実は新しい階層に向かうに当たってランタンを用意していたけど、今回は無駄な荷物になってしまった。

私が背負っているバックパックには、回復薬の他に探索に使う道具も入っている。

私達が会話をしながら通路を進む一方で、前方にいるマーガレットちゃんと剣士君も談笑をしていた。二人は同じ剣士だけあって話が弾む所もあるのだろう。

私達から少し離れた後方では、パーティで一番背が高いリーダーが一人で歩いている。この人は、他人に興味ない、といった感じ。

６階層に足を踏み入れてから随分経つが、未だ私達はモンスターと遭遇していない。

ダンジョン探索をしてもなかなかモンスターを見つけられない日もある。

仲間達が楽しそうに話しているのは、長い時間この階層にいて空気に慣れたからだろう。

私はまだそこまで気楽になれそうにない。

ただ私達はお金を手に入れるためにこの場所に来ているので、お散歩をして地上に帰りました、というわけにはいかない。

だからこうしてモンスターを捜しているんだけど……。

曲がり角の直前で、前を歩いていた二人が唐突に歩みを止めた。

弓使いさんは急停止することができたが、私は立ち止まれずにマーガレットちゃんの背中にぶつかってしまう。

「……どうしたの？」

鼻を触りながら尋ねる私の質問に、マーガレットちゃんは無言で前を指して答える。

迷宮の明かりが照らす通路の先、曲がり角の奥にそれはいた。

「ホブ・ゴブリン……」

６階層の探索にあたり事前にアンズさんから教えてもらったモンスターの名を呟く。

これまで散々私を苦しめてきたモンスターに姿形は似ている。しかしその体躯は一回り以上明らかに大きい。

腕力が強化され『最弱』と呼ばれなくなった緑色の怪物は、低級モンスターの区分けから外されるほどの戦闘力を有している。

視線の先にいるホブ・ゴブリンは一体。屈んだ体勢で壁から湧き出る水を飲んでいる。

周りに他のモンスターの姿は見当たらない。

新しい階層で見つけた最初の獲物を目の前にして、マーガレットちゃんと剣士君と大剣使いのリーダーが顔を見合わせて頷きあう。

三人はそれぞれの武器を握り締め、曲がり角の先に飛び出した。

剣士君が先行する。片手剣を構えて強襲するが、足音で接近を気付かれてしまう。

「こいつ、素早い……！」

剣士君の呟き通り、ホブ・ゴブリンはその体格に見合わない俊敏さで初撃を回避する。

距離を取り向かい合う一人と一体。

このまま戦闘が開始すると思われたが、ホブ・ゴブリンは剣士君に背を向けて逃げ出した。

しかしその行く先には、今まさに大剣を振り降ろさんとしているリーダーがいる。

ドンッ、と地面が大きく揺れた。

直撃こそしなかったもののリーダーの渾身の一撃は、ホブ・ゴブリンの行く手を塞いで立ち止まらせる程の衝撃を放った。

動きを止めたモンスターの背中に二人の剣士が斬りかかる。薄暗い通路の中で打ち上がる血飛沫と悲鳴。

狭い通路で行われる三対一。

私と弓使いさんは戦闘に参加できず、曲がり角の近くで取り残されてしまった。というか戦闘に関与する必要が無かった。

いつの間にかホブ・ゴブリンは三人の剣士に包囲されていた。

ホブ・ゴブリンがダンスを踊る度、緑色の体に切り傷が増えていく。反撃を行おうとしても、拳と剣の間合いの差によって一方的に斬り伏せられてしまう。

逃げ出そうとすれば三人の内の誰かが行く手を阻み、隙を見せた途端他の二人が斬撃を浴びせる。

戦闘の結末は、剣術の才が無い私から見ても明らかなものだった。

満身創痍のホブ・ゴブリンが、マーガレットちゃんに向かって駆け出す。

決死の表情で迫るモンスターに対し、白髪の剣士は反転して背後の壁を蹴り、跳んだ。

ホブ・ゴブリンの頭を飛び越える高さで静止するマーガレットちゃん。【ステイタス】によって強化された身体能力を駆使し、空中で強引に体を捻る。

遠心力と共に伸ばされる美しい左脚。落下の勢いを加算した蹴りの一撃がホブ・ゴブリンの顳顬に炸裂した。

ダンジョンの明かりを反射する白髪が半円を描く。左脚を振り抜いた姿勢のまま、左手で上半身を支えて着地。

一方、蹴り飛ばされたホブ・ゴブリンの体は錐揉み回転をしながら地面を跳ねた。数回跳躍した傷だらけの肉体は、うつ伏せの体勢で停止し、動かなくなる。気を失ったようだ。

地面に横たわるホブ・ゴブリンにリーダーが近づく。彼が握る身の丈程の大剣が断頭台のように突き立てられた。

肉体が二つに別れるホブ・ゴブリン。

６階層最初の戦闘は見事勝利を収めた。

「荷物持ち、さっさと魔石を抜き取れ！」

戦闘が終わった直後、役職を呼ばれた私は我に返る。自分の仕事を遂行するため、モンスターの死体に駆け寄ろうと走り出した時だった。

「あっ……」

マーガレットちゃんや他の仲間達とも違う、通路の向こうにいるもう一体と目が合った。

「えっ」

私の視線の先にいる新手のホブ・ゴブリンにマーガレットちゃんも気付いたらしい。

思考が真っ白になっている私と異なり、彼女は瞬時に判断して走り出した。剣士の機動力を駆使してホブ・ゴブリンに接近する。

しかしモンスターの行動の方が速かった。

『ジャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア‼︎』

——大叫喚。

ホブ・ゴブリンの叫び声が通路に響き渡る。

耳を塞ぎたくなるような大声。

しかしマーガレットちゃんは片手剣をモンスターの喉に突き刺し、一撃で大音声を止めてしまう。

だが、

『ジャアアアアアアア！』『アオオオオオオオン！』『ガルルルルルウ！』

とモンスターの雄叫びが６階層中から連鎖するように響き渡る。

そして聞こえてくる大勢が私達に向かってくる足音。その足音は勿論人間のものではなく、様々な種類のモンスターによるもの。

「退避ッ⁉︎」

マーガレットちゃんの指示を受け、パーティメンバー全員が弾かれたように走り出す。

未だ状況が飲み込めない私に「シオンも走って！」とマーガレットちゃんは手を引いて、これまで歩いてきた通路に引き返した。

☆☆☆

薄暗い通路に複数の足音が鳴り響く。

大慌てで駆け抜けていく五人の冒険家。

それから数離れた後方にはモンスターの大群。

ホブ・ゴブリン、灰色狼、迷宮蜥蜴、影武者……。

追走してくる６階層初出のモンスター達。その総数は十や二十を優に超えている。

。

一体のモンスターの呼び声によって、階層中のモンスターが集まってくる異常事態。

ダンジョン内で起こる絶体絶命の危機に私達は陥っていた。

「えいっ！」

弓使いさんが後ろを向いてモンスターの群れに矢を放つ。

空中に弧を描く矢は一体のホブ・ゴブリンに命中したが、大群の勢いは収まらない。

弓による遠距離攻撃も焼け石に水と判断し、弓使いさんも前に向き直って走り出した。

６階層中から敵が襲い掛かってくる状況を切り抜けるため、私達は５階層への脱出を試みた。

通ってきた道を急いで戻り、上の階層に続く連絡路を目指す。

しかし必死に脚を動かしている間も、モンスターの遠吠えは止まらない。そして壁を挟んで伝わってくる怪物の気配が、事態がより深刻な方へ向かっていることを予感させた。

私達の進行方向、通路の前方に一体のホブ・ゴブリンが現れた。

そう、モンスターが来るのは後方からだけではない。前後左右、通路が繋がっている場所全てから敵は強襲してくる。

接近してくる怪物を確認して、パーティの先頭を走るマーガレットちゃんは走行速度を緩めないまま、片手剣の柄を両手で握り直した。

全速力で激突する緑色のモンスターと白髪の剣士。

鋭い爪を振り下ろすホブ・ゴブリンに対して、マーガレットちゃんは一声。

「——ッ！」

掛け声と共に繰り出す剣の先端。疾走の速度を纏った一撃が緑色の胴体を貫通する。

正面衝突の衝撃で大きく揺れたホブ・ゴブリンの上半身。

相対するマーガレットちゃんは走行を続けたまま剣身を引き抜く。

勢いよく溢れ出る血液。

支えを失った緑色の肉塊は、慣性の法則に従い地面へ崩れ落ちてしまう。

足元に転がってくる出来立ての死体を、私は跳びはねて回避した。

怪物の行進が始まってからマーガレットちゃんが倒したモンスターは、これで十六体。

私達のパーティが未だ全員無事でいられるのは、先頭を行くマーガレットちゃんと剣士君の頑張りに依るところが大きい。

当然、二人に掛かる負担は大きい。

事実、マーガレットちゃんの体には大量の生傷が付けられている。回復薬を飲むことができないほど余裕がない証拠だ。

それに引き換え、私はまだ一体もモンスターを倒していない。

仲間全員が危機に陥っているにも関わらず、私はまた守られてしまっている。

ナイフを握る右手に力がこもった。

しかしその拳をモンスターにぶつけることはできない。

自分の力不足は理解している。私が６階層のモンスターに立ち向かえば、その先の未来は容易に想像がつく。私じゃ、マーガレットちゃんの代わりになれない。

『ジャジャジャア！』

先頭から少し遅れて走っていると、横の道から踊り出てきたホブ・ゴブリンが私とマーガレットちゃんの間に割って入ってきた。

背後からマーガレットちゃんを襲おうとしているのか。ホブ・ゴブリンは私に目もくれず、先頭の剣士を追い掛ける。

狙われている本人は、状況の対処に手一杯で後ろの様子に気付いていない。

鋭い爪が無防備な背中に迫る。

体に大きな穴を開けられた白髪の剣士は、その美しい髪を血で汚しながら地面へ叩きつけられてしまう。

そんな光景を幻視した私の体は、加速した。

バックパックの存在を忘れ、服を着ていることさえ感じなくなってしまう。周囲の騒音も自分の足音も聞こえなくなった。

私が知覚している情報は、目前の敵の姿と右手に握るナイフの感触のみ。

軽快な足取りで地面を蹴る。

ゴブリンの魔石の位置は胸の中央。体格が一回り以上大きくなったホブ・ゴブリンとは言え、体の構造は変わらないだろう。

ホブ・ゴブリンの背中から伸びる灰色の線をナイフの刃先で撫でる。

まるでその線の先に何があるのか分かっているかのように。

その先で何が起こるか知っているみたいに。

——お前の『』はここだ！

灰色の線の終点が訪れた。銀色の刃物を突き立てる。

右手に伝わる僅かな抵抗。

しかし緑色の背中はすぐに抵抗を諦め、自らの凶刃を受け入れてしまう。

ナイフの先端が硬い物にぶつかった。それを確かめ右手を振り抜く。

。

私が使える唯一の技。単純ながら一撃必殺である盗賊の暗殺技術でホブ・ゴブリンの命を刈り取る。

モンスターの全身が灰に変わるのを確かめるまでもない。足元に広がるモンスターの死体だった物を運動靴で踏み越えていく。

灰色の線は視界から消えた。標的の背中だけを捉えていた私の視界が正常に戻る。

けたたましい足音が耳に届く。これは後方にいる大量のモンスターによるものだ。

前方を見る。

白髪をはためかせながら先頭を走る剣士は健在していた。

友人の無事に、ほっと胸を撫で下ろす。

するとバックパックの重さが背中にのしかかった。

安心したのが原因か、全速力を超える速度で走ったのが原因か、羽のように軽かった全身が石のような重たさに早変わりする。

急激な速度低下で脚が縺れてしまう。

「大丈夫か、荷物持ち？」

地面に倒れ込みそうになる私を支えたのは、パーティの最後尾にいたリーダーだった。パックパックを掴んで引き起こしてもらう。

リーダーはこの逃走劇の間、モンスターの大波に対して一人で殿を務めていた。大軍の中から突出してくる敵を追い返していたのはこの人だ。

パーティの進路を切り開いているのはマーガレットちゃんと剣士君だが、リーダーがいなければ私達はモンスターに追い付かれていたに違いない。

彼が私のすぐそばにいるということは、モンスターが警戒して近付いて来なくなったか、リーダー一人では対処しきれなくなったかのどちらかだろう。

「荷物持ち、その背荷物を俺に寄越せ」

その言葉が言い終わるよりも先に、私の背中からバックパックを奪い取られてしまう。

重荷が無くなって体が楽になった。

リーダーは苦しそうな私を見兼ねて手を差し伸べてくれたのだろうか。普段の言動からは想像できないが、実は優しい人だったのかもしれない。

「ありがとうござ——」

「それじゃあ、最後の仕事くらい頑張れよ、荷物持ち」

感謝の台詞をリーダーが遮る。彼の真意を察することができない私が「それってどういう意味ですか？」と質問しようとした時。

両足が地面から離れた。

遅れて腹部に鈍い痛みが走る。

自分が誰かに殴り飛ばされたと理解したのは、体が宙に浮いてから数瞬後のことである。

限界まで引き延ばされる時間の中で、仲間達の背中が遠ざかっていく。

依然モンスターと戦っているマーガレットちゃんと剣士君。驚いた顔をしている弓使いさん。そして私から分捕ったバックアップを担ぐリーダー。

「あッ！ ぐッ！ ぐわッ⁉︎」

地面に打ち付けられる私の体。ぐるぐると転がりながら悲鳴を上げてしまう。

両手をついて上半身を起こす。

荷物持ちの仕事。

荷物運搬。道具補充。戦闘支援。死体処理。

そして、緊急時におけるパーティの囮。

リーダーが言っていた言葉の意味を今更になって理解してしまった。

仲間達の姿はもう見えない。それだけ離れてしまったと言うことである。そして仲間達に置いていかれたということは、つまり……。

ドンドンドン、と無数の足音によってダンジョンが揺れた。

足音が聞こえてくる方へ体を捻る。

仲間達がいる方向とは反対側。地面を揺らす足音の発生源、モンスターの大軍が目の前に迫っていた。

逃げなければ。

呑み込まれる。切り裂かれる。喰い殺される。

本能がこの場からの逃げろと指令を出してくる。しかし思うように体に力が入ってくれない。

「シオーーーン！」

薄暗い通路に少女の声が響いた。

身体中を傷だらけにした白髪の剣士が、右手を前に突き出して、こちらに駆け寄ってくる。

パーティから遅れた私を連れ戻そうとしているのだろう。

だけどもう間に合わない。モンスターに近付き過ぎた。

このままマーガレットちゃんの手を握れば、二人とも怪物の餌食になってしまう。

「手を伸ばせ！」

 それでもマーガレットちゃんは懸命に私を助けようとする。

 仲間だから、友人だから、掛け替えのない人だから。

だけどマーガレットちゃんと同じくらい、私もマーガレットちゃんに生きて欲しいんだ。

親友が伸ばした右手を振り払う。

「私はいつもマーガレットちゃんに助けられてばかりだから、今回は私がマーガレットちゃんを助けたいんだ」

 荷物持ちは、荷物持ちらしく自分の仕事を全うしよう。

私達が今いる通路から直角に繋がる横の通路に飛び込んだ。

「待て、シオ——」

親友の声が騒音に掻き消されてしまう。

モンスターの足音が追いかけてくるのを確認して、私は薄暗い通路を一人で走り出した。

☆☆☆

薄青く発光するダンジョンの壁。仄暗い通路に私の足音が反響する。どこまでも続く土の地面は静けさを取り戻していた。

　静寂の中を一人歩く。

　私を追いかけていたモンスター達はいつの間にかいなくなっていた。追跡を諦めてくれたのだろうか。

一緒に探索を行っていた仲間達の姿もない。

現在地点は、まだ６階層の筈。出鱈目に走り続けた時の記憶を掘り起こして、自分の況を確認する。

所持している物は、護身用のナイフのみ。

回復薬を始めとした道具類は全てバックパックに入れていて、今の私は何も持っていない。逃走中にモンスターから付けられた傷がジンジンと痛む。

……生き残ってしまった。

自分の体が証明する一つの事実を、私は受け止められていない。

親友を助けるために囮になった。大切な人の守るためなら、死ぬことさえ怖くなかった。

だから、軽傷は負っているとはいえ、自分の体が五体満足であることを信じられずにいる。

不意に、頭の上から何かが落ちてきた。

音も無く目の前を通り過ぎていったそれを、顔を動かして追いかける。

青い花。

それは昨日、とある人物から頂いた物だった。

——お守りなのです。持っていればまた会えるのです。

花びらと同じ空色の髪の王子様の言葉を思い出す。

「王子様と約束をしたんだ。地上に帰らなくちゃ」

心の中の蝋燭に僅かな火が灯る。

走り回った時間から計算して、仲間達は既に５階層に辿り着いているだろう。

まずは自力での６階層からの脱出。モンスターと遭遇しないように身を隠しながら、５階層に繋がる連絡路を目指さなければならない。

その後、マーガレットちゃん達との合流。

そして、王子様との食事。

今後の方針は定まった。無謀にも思えるような過酷な工程だが、やるべきことが決まったら、後は目的に向けて行動するだけだ。

足元に落ちた花飾りを拾い上げようと手を伸ばしたその時、

——バリバリ、と。

頭の中で警鐘が鳴った。

何かに弾かれたように、私の体は振り返る。

私の背中のすぐ後ろ、微光を放つダンジョンの壁に真っ黒な亀裂が走っている。

　そして、——バリバリバリ、と。

　頭の中に鳴り響く鐘の音は大きくなっていく。

　天井にまで届く巨大な亀裂を発見した私は、逃げるようにその場から走り出した。

　一歩でも前へ、一歩でも遠くへ。

　バリバリバリバリバリバリ————ドンッ！

衝撃と共に虚空から突き出したのは、幹のように太い腕。緑色の拳が何かを探すように空中を泳ぎ、ダンジョンの壁の端を掴むとそれを握力で破壊する。

今まさに私の目の前で起こっているのは、ダンジョン探索を生業にする冒険者なら一度は目にする現象。

モンスターの誕生。

内側から卵の殻を割るように壁の隙間から姿を現したのは、濃緑色の巨人、『オーク』。

『ヴヲォオオオオオオオオオオオオオオ！』

醜悪な豚顔が雄叫びに似た産声を上げる。

壁の中から通路に跳び出た緑色の怪物は、上方から地面を見下ろして足元の私を補足した。標的を目掛けて、３に匹敵しうる巨体が追走を始める。

振り下ろされる鉄槌。震えるダンジョンの地面。

見た目からは想像できない速度でこちらに向かってくるオーク。

幹のように太い足が地面を踏み付ける度に視界が揺れる。無我夢中で走っていた私は体勢を崩してしまった。

立ち止まった私の後ろにオークが到達する。

大きな右手が私の胴体を掴む。抵抗する術も無く地面から引き剥がされて、空中へ持ち上げられた。

「うわぁ！　ああ！　ああぁあああああっ‼」

メキメキと体が上げる悲鳴。口から出る絶叫。

そんなことを気にせずとばかりにオークがとった行動は、戦力投球。

右腕の振り下ろしと共に拘束を解かれる。すさまじい勢いで横に吹き飛ぶ私の体。

背中から通路の突き当りに激突。衝撃と一緒に体内の空気が全て吐き出されてしまう。重力に引き寄せられ地面に墜落。

死んでいた。殺されていた。【ステイタス】の耐久補正がなければ、今の一撃で私の体は悲惨な肉塊に成り下がっていた。

奇跡的な受け身の体勢で一命を繋ぎ留める。

しかし奇跡は一度しか起こらない。

ピクリとも動かない体。体の奥から溢れ出てくる物が呼吸の邪魔をする。

一歩ずつこちらへ近付いてくる振動。

終焉の時を前にして、私は逃走さえ諦めてしまった。

助けて、マーガレットちゃん。

この期に及んで友人に助けを求めてしまう。

そんな他力本願な自分が嫌いだったのに。そんな自分を変えるために冒険家になった筈なのに。

後悔、失望、恐怖、落胆……。様々な感情が混ざり合って視界がぐちゃぐちゃに歪む。

——助けて、王子様。

「お母様は、言っていた」

ダンジョンに響く天使の声。しかしそれは私を天国へ導く幻聴でも幻覚でもない。

オークを挟んだ通路の向こうから声の主は現れる。

小さな体躯。あどけない声。

この場に不釣り合いな存在の両目に私とオークの姿が映る。

「男には、絶対にしてはいけないことが二つだけある」

　バックパックを投げ捨てて、背中の鞘から片手剣を引き抜いた。

王子様の身の丈に合わせた。剣身に施されたの装飾がダンジョンの明かりを反射してキラキラと輝く。

オークは、死にかけの獲物から新たにやってきた乱入者の方へ体の向きを変える。

「一つは、食べ物を粗末に扱うこと」

空色の髪。処女雪のように白い肌。血のように赤い頬。

瞳の色は、

冒険家の服装が似合わない可愛らしい顔が、目の前のモンスターを睨みつける。

「もう一つは、泣いている女の子に気付かないことだ、と」

武器を持っていない方の手でオークを指す。

「僕がお前を倒す」

『ヴヲオオオオオ！』

王子様の言葉の意味を理解したかのように怪物は咆哮を飛ばす。

向かい合う両者は接近戦を行うべく、その場から駆け出した。

モンスターの体重によって揺れる地面。二人の体格差は絶望的な程であった。

上方から繰り出される右拳。腕の長さの分だけ攻撃範囲が広いオークが先手を取る。

剛腕を、王子様は最小限の動きで回避。

お返しとばかりに振り下ろされる短剣。緑色の皮膚から赤い血液が噴出した。

走る速度をそのままに、王子様は怪物の体の下を潜り抜けていく。その間に光る三つの斬閃。三本の赤線がオークの体に刻み込まれる。

敵を視界から外さないように、王子様は体を反転させながら足を止めた。

そこへ襲い掛かる右の裏拳。側面からの攻撃に対し、王子様は身軽に後方跳躍。

距離を取って着地し、再び駆け出した。目にも留まらぬ速さで距離を詰める。

「！」

　そして短剣を前に突き出しながら、突進。

発揮される『力』の能力値と剣士の技。甲高い衝突音。凄まじい一撃が緑色の巨体を大きく後退させる。

　すかさず、体勢を崩したオークの元へ跳び込んだ小さな王子様。地面を蹴り、壁を蹴り、敵に斬撃の嵐を見舞う。

　圧倒的なまでの『敏捷』の差。王子様を捉えることができないモンスターが、一方的に翻弄されてしまう。

強い。強すぎる。

今、私の目の前で戦っている男の子の【】は、私やマーガレットちゃんよりも遥かに強い。

　オークの上半身に大きな縦線が引かれる。

天井付近で宙返りをした王子様の両足は、私の目の前に着地した。

「……」

　壁にもたれかかる私と視線を合わせて、王子様は微笑んだ。

『ヴヲオオオォ！』

満身創痍のオークが最後の突撃を敢行する。

地面を揺らしながら向かってくる相手に対し、王子様は一言、

「……デルフィニウム・キック」

剣を投げ捨て、右脚を後ろに引く。左足の蹴りで跳び上がった王子様は、右脚を伸ばして体を捻る。

オークの首に炸裂する蹴りの一撃。怪物の巨体が地面に叩きつけられる。

爆散。

舞い上がった灰と共に落ちてくる天使の体。

迷宮に響く小さな悲鳴。迫る怪物の爪牙。間一髪で間に入る銀の一閃。

残されたのは、地面に座り込む私と格好よく、いや、可愛らしく舞い降りる王子様の姿。

見上げる顔が赤に染まる。

恋物語が始まる予感……！

王子様はダンジョンにいる、訂正、王子様はダンジョンにいた。